

第47回 全日本大学男子 選手権大会

平成24年9月1日(土)~3日(月)
埼玉県坂戸市・鶴ヶ島市/坂戸市民
総合運動公園・鶴ヶ島市運動公園

日ソ協記録委員
常岡昇



標記大会は、過去に国体の成年女子インターハイ男子の会場として利用された埼玉県坂戸市・坂戸市民運動公園の3会場と国体の成年男子の会場となった鶴ヶ島市運動公園において、各プロク予選会を勝ち上がった32チームの精鋭が参加して開催された。

坂戸市は、「武蔵野のみどりと太陽のあふれる、ながい歴史と伝統にはぐくまれたわがまち」をキャッチフレーズにし、また、鶴ヶ島市は、「人を・暮らしを・地域を元気にすることをめざし、市民と行政が一体となって地域づくりを進めている」まちである。

大会は、30度を超す猛暑の中で行われた。初日の午前中は、天候がよく、順調に進行したが、午後に入ると雷雨等による中断が3試合あったため、夜間照明施設のなかった第2多目的運動場の4試合目が軟式球場Bの5試合目に移動し、試合終了時刻は21時47分となった。2日目は、降雨の影響により2試合目以降、鶴ヶ島市運動公園サブグラウンドから多目的広場に移動し、試合が行われた。この移動に際し、迅速な対応を取っていただいた会場委員の皆さんに対し、心より感謝申し上げます。

大会初日は、1回戦16試合が行われた。5試合がコールドゲームとなったが、僅差の試合が多く、手に汗握る熱戦が展開された。

2日目は、2回戦8試合と準々決勝が行われ、2回戦で一昨年優勝の環太平洋大(岡山)が初出場の九州共立大(福岡)に逆転負けを喫し、敗退。九州共立大(福岡)は、続く準々決勝でも、昨年の覇者・中京学院大(岐阜)

を破り、ベスト4進出を果たす大健闘を見せた。

ベスト4には、3年連続のベスト4進出ながら、前回、前々回は3位止まり。19年ぶりの決勝進出を狙う中京大(愛知)。7年ぶり2度目の優勝をめざす早稲田大(東京)。初出場で快進撃を続ける九州共立大(福岡)。「優勝候補」に挙げられていた名門・日本体育大(東京)を破って勢いに乗り、初の決勝進出を狙う神戸学院大(兵庫)の4チームが勝ち上がった。

大会最終日は、毎試合大量得点を挙げ勝ち上がった早稲田大(東京)と、接戦の連続を制し、僅差のゲームをモノにしてきた神戸学院大(兵庫)が決勝に進出。

決勝は、攻守に勝る早稲田大(東京)が11得点を挙げ、5回コールド勝ち。5試合中4試合にコールド勝ちを収めるという圧倒的な強さで7年ぶり2度目の優勝を飾った。また、今大会において、早稲田大(東京)の太田宗之祐が、8連続安打、最高打率8割3分3厘の大会新記録を樹立。チームの優勝に貢献した。

〈準決勝〉

中京大 00000 0
早稲田大 2024x 8

※大会規定により5回得点差コールド
(中) ● 深津一和 田
(早) ○ 古川一平 野
▽ 大川(早)

〔審〕 P 関谷 1 森系 2 重信 3 関口
〔記〕 田中

後攻の早稲田は初回、2番・太田が自身の連続安打記録を「8」に伸ばす左前安打で出塁すると、すかさず二盗これが捕手の悪送球を誘い、三進。3番・吉田の中前安打でまず1点を先制さらに四球、内野ゴロで二死一・三塁とし、6番・溝口の中前に抜ける安打でこの回2点を挙げ、試合の主導権を握った。3回裏には、相手守備の乱れに乗じて2点を加え、4回裏には打者一巡の猛攻。4本の長短打を集中し、一挙4点を追加。予想外の一方的な試合展開となった。

守っては、エース・古川が中京打線を1安打に抑え込み、二塁を踏ませぬ好投。見事な完封で5回コールド勝ち。決勝進出を決めた。

〈準決勝〉

九州共立大 0000001 1
神戸学院大 110000x 2

(九) ● 前田一山 田
(神) ○ 片岡一丸 山
▽ 函川島(神)

第47回全日本大学男子選手権大会

1	中国	京大	9	6
2	国際	大東	1	4
3	京都	大京	4	2
4	広島	大京	2	3
5	高天	大京	8	2
6	高天	大京	3	1
7	高天	大京	1	6
8	高天	大京	0	5
9	高天	大京	10	10
10	高天	大京	6	4
11	高天	大京	6	6
12	高天	大京	7	0
13	高天	大京	11	9
14	高天	大京	4	1
15	高天	大京	1	0
16	高天	大京	0	7
17	高天	大京	3	3
18	高天	大京	4	5
19	高天	大京	2	2
20	高天	大京	10	1
21	高天	大京	1	14
22	高天	大京	11	7
23	高天	大京	7	1
24	高天	大京	1	9
25	高天	大京	0	4
26	高天	大京	1	0
27	高天	大京	1	1
28	高天	大京	9	4
29	高天	大京	0	9
30	高天	大京	1	5
31	高天	大京	1	6
32	高天	大京	6	5

〔審〕P川尻 1小柳 2海老原
3古牧

〔記〕渡沼

後攻の神戸学院は初回、二死から3番・川島が中越ソロ本塁打を放ち、1点を先制。2回裏には5番・大道が二塁横を抜く安打で出塁すると、ワイルドピッチ、犠打で三進。7番・河添の左前適時打で追加点を挙げた。

守っては、エース・片岡が7安打されながらも堅守に助けられ、最少失点に抑える力投。初の決勝進出を完投勝利で飾った。

一方、初出場ながら一昨年、昨年の覇者を倒すなど、快進撃を続けてきた九州共立は、4回を除き、毎回安打。走者は出すものの、決定打を奪えず、7回表、二死から7番・小林の左前適

時打で1点を挙げ、一矢を報いたが反撃もここまで。準決勝で力尽きた。

《決勝》

神戸学院大 00010
早稲田大 0632x
11

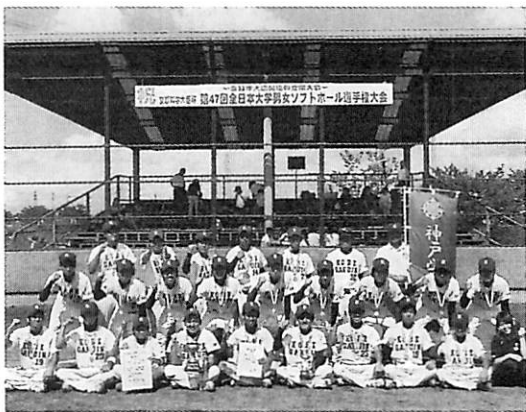
※大会規定により5回得点差コールド
(神) ●片岡・永野・丸山
(早) ○古川・平野
▽北村、平野(早)
〔審〕P内藤 1川村 2古牧 3重信

〔記〕平井

1回戦から大差で勝ち上がった早稲田は2回裏、4番・平野が遊撃横を抜ける安打で出塁すると、敵失、四球で無死満塁とし、7番・栗田への押し出しの死球で先制。さらに、続く8

番・北村の二塁打で二者を迎え入れ、一死後、1番・兼子のバント安打で再び満塁とし、2番・太田の死球で押し出し。二死後、この回2巡目の打席となる4番・平野にも二塁打が飛び出し、打者11人を送る猛攻で一挙6点を奪い、早々と勝負を決めると、3回裏には2安打に相手守備の乱れも絡み、3点を追加。4回裏にも3安打と犠飛で2点を加え、5回コールドで7年ぶり2度目の優勝を飾った。

一方、神戸学院は初めての決勝進出ゆえの硬さからか、3失策が失点に絡み、完敗。ここまで19イニングを投げ、わずかに2四死球と制球のよかったエース・片岡が2回裏の1イニングだけで3四死球と乱れる予想外の試合展開となり、まさかの大敗を喫した。



準優勝・神戸学院

インカレを終えて 埼玉県協会広報委員長 舘岡 憲一

男女各32チームが参加のもと、埼玉県市他4会場8面において、9月1日から3日間にわたり、標記大会が開催された。

7月の梅雨明けから雨の降らない記録的な猛暑の続いた埼玉県。しかし、8月31日(金)午後4時からの開会式に合わせたように雲行きが怪しくなり、大会初日、2日目はいわゆる「ゲリラ豪雨」で、各会場ともに試合の一時中断を余儀なくされた。

大会初日の坂戸会場においては、長時間の中断のため、最終試合をナイタ設備のあるグラウンドへ移動して実施したため、20時試合開始。22時にはナイター照明が切れるよう設定された会場での試合となり、消灯時間までの2時間で「何とか5回まで進んでくれ」と願う関係者。心配されたその試合に関しては、5回得点差コールドで決着。21時47分試合終了となり関係者一同胸をなでおろす場面もあった。

また、今大会では各会場に配置された広報委員が、その様子を自宅パソコン前で控えているホームページ担当の私に携帯電話で連絡し、即更新。全国にその様子を発信した。

当広報委員会では、「結果は即時ホームページで発信」を合い言葉に、活動しているが、今大会でも広報委員を各会場に配置し、1・2回戦は試合終了後、3回戦から決勝においては試合の途中経過と終了後の結果、得点表とトーナメント表を逐一更新、ほとんど試合結果を5分以内に全国に発信することができた。

この電話でのやり取りもすでに時代遅れ、会場から直接発信する方法もあるだろうが、現状では技術と環境が揃って行かない。動画の時代に入ろうとしている昨今、小生はこれまで対応できるものか、自問自答する毎日である。